

わたしと
おかあさん

母千代子は「女医さん」と呼ばれていました。ミルクのない家にはミルクを持って、発熱した人には水を持って往診し、寒い日は患者さんに自分の上着を掛けていました。そんな母の働きぶりはまさに「人助け」。おのずと医師という仕事にあこがれるようになりしました。

「せっかく女の医者になったのだから、婦人の病気を治療したり相談相手になった方がいいのでは」という祖父の勧めで産婦人科を選んだようです。1937年、有田市箕

医療法人「千徳会」理事長 成川 守彦さん(68)

人助け続けた「女医さん」



なるかわ・もりひこ 1941年生まれ。有田市出身。66年、県立医大卒。75年に成川産婦人科医院、82年に桜ヶ丘病院を開設。医療法人「千徳会」理事長。05年から県病院協会会長。

島の自宅で開業しました。

待合室には患者さんがあふれ、看護師も毎日午前8時半〜午後9時半まで働きっぱなし。夜中でも電話で呼ばれればどんなに遠くても輪タクで往診や分娩に出掛け、大みそかは夜中の0時を過ぎてから皆でやっとお茶を飲むような状況でした。

母に本を読んでもらった記

憶はありませぬ。一人っ子でもあり、さみしい思いもしました。忘れられない思い出は大阪市内の高校に通っていたころ。私が「こんな下宿嫌や」と電話すると、翌朝、母が大阪まで来て下宿を一緒に探してくれました。仕事を残し、残っていたのです。「女医さんあわてて駆け付けてくれた母らしいな」と思いました。

に、申し訳ないやうらしい瞬間でした。

93年12月、母は84歳で亡くなりました。葬儀の後、母の部屋を片付けていたら、借用の束が出てきました。たまには捨てていたのが、一部残っていたのです。「女医さんあわてて駆け付けてくれた母らしいな」と思いました。

60年初頭、国民皆保険になるまでは自由診療でした。お金のない人からは決して治療費を取らず、逆に入院費用を立て替えたりしていました。寝る間もないほど働きながら、医院の経費の支払いに追われていました。

母を長く支えてくれた看護師や事務員からは後年、「給料が安かった」と何度も聞かれました。母とげんかになって、住み込みの看護師が怒って出ていくこともしばしば。それでも「やっぱり女医さんがええわ」と笑って帰ってきてくれました。

今でも全く知らない方から、「女医さんには世話になりました」と頭を下げられることがあります。何年たっても、母のことを覚えていて、感謝してくださっていることに驚きます。「情けは人のためならず」という言葉通りです。【聞き手・加藤明子】